

コンメディア・デッラルテによるドン・ファン劇のシナリオ

近藤直樹

〈Sommario〉

Il Don Giovanni, subito dopo la prima comparsa in Spagna nel 1625, raggiunge e domina anche i palcoscenici italiani con alcune compagnie della Commedia dell'arte, fino ad arrivare al *Dom Juan* di Molière nel 1665. Nel Seicento, in fatti, si trovano tanti scenari, fra i quali ne traduco qui due dai manoscritti di Ciro Monarca, e uno da quelli di Casamarciano.

I. 解題

「ドン・ファン」劇ほど、17世紀のヨーロッパ演劇を体現し、そして流行を支配したものはない。それは国境を越え、ジャンルを横断し、様々なヴァリエーションを生んで17世紀を駆け抜けていった。女性の征服を最上の喜びとするスペイン貴族の「色事師」ぶりと、大理石の石像に連れられての地獄墮ちという「ドン・ファン劇」の二つの主要な要素は、迷信と彼岸への恐怖をいまだ引き摺りながら、そこに特有の理性を用いて歪んだ形で表現するバロック時代に、まさにふさわしい素材であったことは、他に類をみない成功の理由として考えられる。とりわけ、大理石の石像が動き出し、舞台上に地獄的なものが具現化するクライマックスは、スペクタクルとしての演劇性が盛んなこの時代にあって、貴族から庶民にいたる様々な階層の観客の好奇心を刺激したことは想像に難くない。

少なくとも1630年に、ティルソ・デ・モリーナ（1579-1648）の『セビーリャの色事師と石の招客 *El burlador de Sevilla o El convidado de piedra*』がスペインで刊行されると、同作は瞬時にナポリの宮廷で上演され、1633年には、ジャチント・アンドレア・チコンニーニ（1606-1650）の翻案劇がピサで上演されている。チコンニーニの劇を受けてか、あるいはティルソの劇の初版よりも早い1625年のナポリでの上演を受けてか、当時最盛期にあったコンメディア・デッラルテの様々な劇団が「ドン・ファンもの」を取り上げ、笑劇風のアレンジを加えて上演し、現在、17世紀のものだけで5本のシナリオが伝えられている。今回は、このうち「チーロ・モナルカ写本」（ローマのカサナテンセ図書館所蔵）の *L'Ateista fulminato* と *Il convitato di pietra*, 「カサマルチャーノ写本」（ナポリの国立図書館所蔵）の *Il convitato di pietra* を訳出した。

1. チーロ・モナルカ写本

ローマのカサナテンセ図書館には、17世紀に作成されたコンメディア・デッラルテのシナリオ集が三種保管されている。うち二種は Basilio Locatelli による *Della scena de Soggetti comici di*

B. L. R. であり、その第一部 (*Manoscritti*, 1211) には 50 本のシナリオ、第二部 (*Manoscritti* 1212) には 53 本のシナリオが収められている。そして 48 本のシナリオからなる *Manoscritti*, 4186. *Ciro Monarca, Dell'opere regie* がある。

バジリオ・ロカテッリ (1590-1654 頃) は、ローマで活躍したアマチュアの俳優であるが、合計 103 本のシナリオを編纂したことで、現在ではその名を知られている。コンメディア・デッラルテのシナリオ集としては珍しく、編纂年の記載があり、第一部は 1618 年、第二部は 1622 年と写本にある。

一方の「チーロ・モナルカ」を巡っては、48 本のシナリオの編纂者の名前であろうが、現在にいたるまでその詳細は知られていない。同シナリオ集収録の *Il Medico di suo onore* に「1642 年 10 月 17 日金曜日にフィレンツェで初演された」と書入れがあることから、17 世紀中頃に完成したとされている。このチーロ・モナルカ写本は、「ドン・ファン劇」のシナリオを二本収録している。『雷に打たれた無神論者 *L'Ateista fulminato*』は、主人公の名前が「ドン・ジョヴァンニ」ではなく、アウレリオとなっていることなど、他にも、いわゆる「ドン・ファン劇」の翻案物からの逸脱もみられるが、石像の存在や、女性を手荒に扱う主人公、そして、地獄墮ちの描写など、基本的な要素は共通している。このシナリオで興味深いのは、「色事師」が「無神論者」になっている点であり、さらには神に仕える森の隠者の存在、それを冒瀆するドン・ファン (アウレリオ) の振る舞いなど、後のモリエールの『ドン・ジュアン』を彷彿させる。もう一本の『石像の招待客 *Il convitato di pietra*』は、筋や登場人物もほぼそのまま、ティルソやチコニーニの戯曲をコンメディア・デッラルテ化したものとなっているが、劇中歌の歌詞が掲載されていることなど、資料的価値は高い。また、両者に共通しているのは、死後の「ドン・ファン」の描写と、音楽を巧みに活用した点であろう。ともに、天国と地獄を対比し、その音楽性の違いに言及している点は興味深い。

2. カサマルチャーノ写本

ナポリ国立図書館所蔵の写本 *Gibaldone de soggetti da recitarsi all'impronto, alcuni proprij e gli altri da diversi raccolti di Don Annibale Sersale, conte di Casamalciano* は、カサマルチャーノ伯爵アンニーバレ・セルサーレが収集させた 183 本のシナリオを収録していて、コンメディア・デッラルテのシナリオ集の中では最も規模の大きいものであり、183 本のすべてに、ナポリの仮面ブルチネッラが登場している。「1700 年」と表紙にあることから、写本がまとめられたのが 1700 年であろうとされている。『石像の招待客 *Convitato di pietra*』の粗筋は、チーロ・モナルカ写本の同名シナリオとさほど変わらないが、ラッツィについての指示が具体的で、その点において資料的価値が高い。

使用テキスト

L'Ateista fulminato:

Giovanni Macchia, *Vita avventure e morte di Don Giovanni*, Adelphi, 1991, pp. 193-211.

Il convitato di pietra (Ciro Monarca):

Ibidem, pp. 215-229.

Convitato di pietra (Casamarciano):

The Commedia dell'Arte in Naples. A Bilingual Edition of the 176 Casamarciano Scenarios. A c. e con traduzione di F. Cotticelli, A. Goodrich Heck, Th.F. Heck, 2 voll, Lanham (Maryland-USA), Scarecrow Press Inc., 2001, pp. 426-429.

参考文献

S. Carandini, L. Mariti, *Don Giovanni o l'estrema avventura del teatro*, Bulzoni, 2003.

G. Macchia, *Vita avventure e morte di Don Giovanni*, Adelphi, 1991.

A. Perrucci, *Il convitato di pietra*, Einaudi, 1998.

II. 翻 訳

1. 雷に打たれた無神論者 (チーロ・モナルカ写本版)

登場人物

サルデーニャ王 (子供がいない), 王妃 (その妻, 登場しない), アウレリオ伯爵 (王族にして盗賊), マリオ公爵 (王族), ベルトリーノ (アウレリオ伯爵の召使), プッフエット (マリオ公爵の召使), レアルコ (マリオの父, 石像), テアンドラ (マリオの母, 石像), レオノーラ (マリオの妹), カッサンドロ, アンジェラ (その娘)

隠者 (老人), 伯爵の子飼いの山賊たち, マリオの兵士たち, 盗賊たち
オリヴェッタ (宮廷の貴婦人), 農夫たち, 国王の大臣たち

道具

トランペットとタンバリン。白い石像のための鎧。ズボン, 靴下など, 手袋とともに用いる衣装一式。白い仮面二枚, 男女一枚ずつ, 麻製の髪毛つき。僧服, 白い剣。山賊用の武器と衣装。隠者のための衣装二着, 粗悪な麻でできた女性用の鬘。髭と蓬髪。鬘一式。食事の準備に使う運搬用の大きな籠二つ。衛兵用の外套。正面には, 神殿に変化する屋敷。神殿の中央には記念碑。脇には森。

食事

Ⅲ, テーブルクロス, ナプキン, ナイフ, グラス。天のレオノーラのための白い衣装。プルートの衣装として, 熊手, 王冠, 部屋着, 大きく黒い付け髭, 蓬髪の鬘。霊のための衣装あれこれ。

松脂。ザンニを串刺しにする道具。

第一幕

サルデーニャのカリアリ市内

国王（大臣たち、廷臣たち）、王妃の体調がすぐれず、後継者となる子供を授かることが期待できないことを嘆く。大臣たちは彼を慰める。そこへ、
マリオ公爵、ウエスタ神殿の巫女であった妹のレオノーラを連れ去ったアウレリオ伯爵に対して、侮辱を受けたと言い立て、今も田野で、王国と自らの家柄に泥を塗っているのだと言う。国王は彼に、兵士を自由に使う許可を与え、王国をくまなく探して彼を捕らえ、罰するように命じる。マリオはその任務と権力を引き受ける。そこへ、
ベルトリーノ、農夫の身なりをしているが、実は山賊で、
農夫たち、アウレリオ伯爵から受けた、数々の財産と名誉の被害を直訴しにやってくる。国王、
かならず罰すると言い、一同は宮廷に戻る。

森

アウレリオ、レオノーラ（山賊たち）、二人の愛について語り、短い愛の場面を演じ、けして離れないことを誓い合う。それから、アウレリオ、自分が盗賊になった経緯を明かす。そこへ、
盗賊たち、カッサンドロを連行し、彼の娘アンジェラも連れられてくる。彼女にはカリアリの町に夫がいる。アウレリオはカッサンドロの縄を解かせ、彼は泣きながら退場。娘を返してほしければ一万スクードの保釈金を用意しろと言い、アンジェラを手元に置く。彼女はお願いし、彼は、約束は守ると言う。レオノーラは嫉妬のために、アンジェラを解放するよう頼む。彼は、手放そうとしない。そこへ、
ベルトリーノ、農夫の身なりをして登場し、国王へ請願に行き、そこで嘆いている他の農夫たちを見て、国王がアウレリオの敵のマリオ公爵に命令を与えたと言う。彼はせせら笑い、休みたいからと、配下の者たちを洞窟に遣わし、アンジェラをしっかりと見張っているようにと命じる。配下の者たちはアンジェラを連れて退場。彼は、ベルトリーノ、レオノーラと、その場に残る。神殿が見えてくる。
神殿の扉が開いて、マリオの父母の棺と石像が見えてくる。アウレリオは、復讐のために石像を詰ってやろうと言う。レオノーラはやめるよう彼に頼む。アウレリオが怒ると、彼女はその場を見たくないと、頭を垂れて退場。残った者たちは場面を続ける。ベルトリーノは恐怖に震え、ついに石像は口を開いて語りだす。石像、「死者の平安を乱すなかれ」
アウレリオはベルトリーノとふざけて、尋ねる「乱したら、どうなるっていうんだ?」。石像、「剣で傷つける者は、剣で滅びる」
アウレリオは、もう行かなきゃいけないので、また会うことにしよう、今度は会いきてくれと誘いかける。石像、うなずいて、神殿の扉が閉じる。一同は森に入っていく。

町

マリオ（プッフエツト）、兵士たちの準備ができ次第、彼自ら市壁の外に赴いてアウレリオを捕まえ、ことによるとレオノーラを殺害するつもりだと言う。自分の妹ではあるが、不倶戴天の敵と駆け落ちし、名誉を傷つけたのだから。プッフエツト、暴力を諫める。だがマリオは、ベルトリーノを八つ裂きにしてやろうと言う。そこへ、

マニフィコ、すぐに宮廷に向かい、陛下の新しい極秘の命令を受けるよう、マリオに言う。マニフィコとマリオは退場。プッフエツトはその場に残る。そこへ、

オリヴェッタ、ラッツィを交えて恋の場面。プッフエツト、山賊を懲らしめに、主人と一緒に行かないかと彼女を誘う。オリヴェッタは同意し、二人は軍備を整えるべく、宮廷に向かう。

森

アウレリオ（アンジェラ）、彼女の美をほめたたえると、彼女も満更ではない様子。二人は逢引の約束をするが、レオノーラに気づかれないために、憎しみあっているふりをして、二人の愛を隠しておくことで同意する。そこへ、

レオノーラ、脇ですべてを聞いていて、抱き合う二人を見ている。火縄銃をお見舞いしてやりたいと、怒りのラッツィ。そこで、アウレリオに呼ばれて

ベルトリーノ、登場。アウレリオ、彼にアンジェラを渡し、洞窟に連れていくよう命じる。ベルトリーノ、アンジェラを連れて退場。アウレリオ、その場に残る。そこへ、

レオノーラ、すべてを聞いていたとアウレリオに告げる。彼は否定し、彼女は彼を責める。彼女があまりにしつこいので、アウレリオは激高し相手を蹴飛ばす。彼女は倒れ、彼は、侮辱をこめて相手から武器を取り上げ、「出て行って、お前の好きなところへ戻るがいい、お前の知る限りの最悪のことを俺にやってみろ」と言い捨てて、退場。彼女はその場に残り、嘆きの場面を演じる。そこへ、

隠者、外の空気を吸うべく洞窟から出てきて、ひどい扱いを受けた少女を目にする。彼女は彼にすべてを語り、彼は自分の正体を明かすが、秘密にしておいてほしい、神がお守りくださるだろうと言う。敬虔な慰めをこめて、彼女を草庵に連れていき、第一幕が終わる。

第二幕

森

アウレリオ（ベルトリーノ）、マリオ公爵が自分と対決すべく出発するのがいつなのか、そして何人の兵士を連れてくるのかを知るために、村人の服装をして宮廷に行くようベルトリーノに命じる。相手を待ち伏せにするつもりなのだ。ベルトリーノ、悔い改めるよう主人を諫め、石像の言葉を思い出させる。彼は鼻で笑い、その後、自分も正体を隠して宮廷に行きたいと言い、隠者のことを思い出し、その服を手に入れたいと言う。二人は草庵のドアをたたく。

隠者、すっかり怯えて、自分がかくまっている女性のことを相手が知り、乱暴を働きにきたので

はないかと危惧する。すぐさま跪き、許しを求める。双方ともに誤解をしている。最後にアウレリオたちは、服がほしいのだと言う。隠者の服をはぎとり、その場を後にする。隠者はその場に残って嘆くが、アウレリオたちのことをユピテルに祈り、退場。

町

ブッフエツト、オリヴェッタ、滑稽な恰好をして武器を手に、主人のお供をして、アウレリオの所業を訴えに行く。

マニフィコ（マリオ公爵、配下の者たち）念には念を入れて、危険な目に合わないよう気を付けるべきだと、相手を諭す。マリオは、心配いらぬ、今日のうちに旅立ち、伯爵に復讐し、同時に多くの山賊を片付けて、王国と街道の安全を確かなものにするつもりだと言い、一同、宮廷に向かう。ブッフエツト、彼らを勇気づけて、退場。

森

レオノーラ、粗衣に紐の帯を巻いて、天に対して犯した自らの過ちを嘆き気絶する。そこへ、隠者、蓆を背負って登場し、彼女を目にする。彼女は気を取り戻し、彼は彼女を草庵に連れていく。

ベルトリーノ、村人の恰好をして登場し、武器を隠して宮廷に向かう。

アウレリオ、隠者の恰好をしている。宮廷に行くのに正体を見破られたくないため、誰かの見ている前で着替えたくなかったのだと言う。そこへ、

奥で物音がしたため、アウレリオは脇に身を隠して様子をうかがう。そこへ、

マリオ公爵（オリヴェッタ、兵士、ブッフエツト）、国王の命により、アウレリオと盗賊の一味を掃討すべく、王国全土に対する指揮権を与えられて来た。隠者の恰好をしたアウレリオはそれを聞くと、前に進み出て、別人のふりをしながら彼らを励まし、自身の悪口を言って、アウレリオを捕らえる作戦を披露する。マリオは彼の言葉を信じて、隠者の言う通りにすると言う。一同、退場。

町

国王（マニフィコ）、アウレリオとマリオ公爵が、国王の血族であるため、王国に跡継ぎがない場合には、両者のうちいずれかが次の国王となるのが筋であることを悩んでいる。また、マリオの妹レオノーラがいないために、多くの不都合が生じてしまい、アウレリオは彼女を神殿から連れ去った後で、田舎に引き籠ってしまった。アウレリオが王になれば、反対が起こるであろうから、宮廷から遠ざけておいた方がいいように思えるが、そのせいでかえって王国全土に害悪が広まってしまうおそれもある。マニフィコ、それは一大事であるが、両者とも王国と宮廷においてきわめて重要な人物であるから、助言もはばかれると言う。アウレリオに対する全権を、ライバルのマリオに与えてしまったのは失敗であった、マリオは正義に基づいて

動くことはないだろうから、と言う。そこへ、
ベルトリーノ、村人の恰好をして、アウレリオ伯爵を訴える嘆願書を手にしている。アウレリオの不行跡を大げさに並べ立てる。国王、その村人の話を聞き、言い分を認めてやるようマニフィコに命じて、退場。マニフィコ、話を聞いた後で、既にマリオ公爵が彼を鎮圧すべく兵を率いて城壁を出たと言い、それから、相手がベルトリーノではないかと疑う。二人はラッツィイをして、その後、マニフィコは宮廷に、ベルトリーノは伯爵に知らせるべく森に向かい、退場。

森

アウレリオ、隠者の恰好をして、仲間はどこにいるかと、兵士たちに尋ねる。兵士たち、洞窟や森など、所定の位置についていると答える。アウレリオ、口笛の合図で攻撃することを全軍に伝えるよう命じる。それから、策を使って、公爵の軍勢を分散させておく命令を出しておいたので、相手はわずかな兵を連れているだけなのだとする。そこへ、
ベルトリーノとアウレリオ、ラッツィイの後、お互いの正体に気づく。そこへ、
マリオ公爵、ブッフエツト登場。アウレリオ、相手の武器を取り上げようとする。ベルトリーノ、ブッフエツトを相手に同じことをする。その後、正体を見破られると、
アウレリオの兵士たちを呼び、全員武器を手に登場する。アウレリオ、マリオを銃殺するために神殿の扉に縛り付ける。それから二人の兵士を使って銃殺しようとする。いざ、発砲しようという時に、神殿の扉が開いて、石像が跪き次の言葉を口にする。
「怒りを宥めよ、伯爵よ、日が沈む前に」。全員が逃げる。マリオは縄を解いて自由の身になり、逃げる。アウレリオは彼の後を追おうとするが、見失って、配下の者たちを呼ぶ。石像は次のように言う。「悔い改めよ、お前はただの貴族ではないのだから。悪しき生を送るものは、悪しき死を迎える」
神殿の扉が閉まり、アウレリオは退場。第二幕の終わり。

第三幕

アウレリオ（ベルトリーノ）、部下の兵たちが、すっかり石像を恐れてしまったと嘆いている。
ベルトリーノ、死後には天国と地獄があることを、主人に思い出させる。アウレリオは鼻で笑い、公爵に逃げられたことを悔しがる。そこへ、
兵士、捕らわれの身となったオリヴェッタを連れてくる。そして、負傷者や死者も出たが、マリオ公爵の軍は敗走し、この者はマリオ軍の兵士であると言う。オリヴェッタ、自分は男性ではない、何とか解放してくれと言い、宮廷人の娘オリヴェッタという女性であることを明かす。アウレリオ、女性にひどくあたるつもりはないと言いながら、彼女を洞窟に連れて行って、仲間のお相手をさせて、それが終わったら自由にしてやれという。彼女、それだけで済むのかとせせら笑い、すぐに済ませてやると言う。ベルトリーノのラッツィイ。
兵士、ブッフエツトの支度が出来たと伝える。オリヴェッタ、ブッフエツトがどうしたのかと尋

ねる。アウレリオ、見せてやるように命じる。

幕が開いて、串刺しにされたブッフエツトが現れる。そしてまた幕が下りる、オリヴェッタと兵士たち、退場。伯爵とベルトリーノはその場に残る。そこへ、

アンジェラ、山賊の服装を着て武器を手に登場。アウレリオに挨拶をすると、二人は抱き合う。そこでベルトリーノ、ご主人さまは馬鹿だ、食事をおろそかにしているんだからと言う。アウレリオ、食事がしたいためテーブルの用意を命じ、アンジェラと抱き合いながら、退場。ベルトリーノはその場に残り、テーブルの支度を命じる。テーブルの準備が整うと、そこへ、兵士たち、席について、ごちそうを食べ酒を飲む。アンジェラは大いに喜んで、陽気に酒をがぶ飲みする。そこへ、

隠者、草庵から出てきて、喜捨を求める。アウレリオは彼をからかう。最後には、彼に、地獄……………許しを与える¹⁾。アウレリオ、笑いながら彼を侮辱し、お宝は好きかと尋ねる。その後で、牢屋に行ってこいと兵士に命じ、兵士、命令に従う。そこへ、

レオノーラ、贖罪者の恰好をして登場。アウレリオ、この女はお宝か、それともお恵みかと、彼に尋ねる。隠者、大いなる贖罪に身を捧げたのだから、神の御霊であると言う。レオノーラ、気を失って倒れ、息を引き取る。アウレリオ、席を立て、隠者を罵る。他の者たちはテーブルを片付け、アウレリオは彼女を神殿に運ぶように命じる。隠者は他の者たちと退場。ベルトリーノはその場に残る。アウレリオ、戻ってくる。そこへ、神殿の扉が開いて、剣を手にした石像と、レオノーラの亡骸が立っているのが見える。ベルトリーノのラッツィ。アウレリオ、自分に何か用があるのか、話でもしたいのか尋ねるよう命じる。ベルトリーノ、ラッツィの後、相手に尋ねる。

石像、そうだと答える。ベルトリーノ、恐怖に震え上がる。アウレリオ、「いつだ？」と相手に聞く。石像は次のように答える。「伯爵よ、今日だ。日が沈む前に」。アウレリオ、承諾して、退場。神殿の扉が閉まる。

町

国王とマニフィコ、山賊とマリオの件について、話している。そこへ、

隠者とカッサンドロ、連れだって道を歩きながら登場し、レオノーラが死んで神殿に埋葬されたことをマニフィコに伝える。カッサンドロは娘のアンジェラが賊に攫われたと言う。そこへ、オリヴェッタ、山賊の手を逃れてきて、敗戦と、ブッフエツトが串刺しにされた件を伝えて、マリオ公爵の身が心配だと言う。そこへ、

マリオ、帽子も、武器も、マントもなく、恐れおののき逃げながら、正気を失ったような様子で登場。伯爵と賊たちにずっと追いかけているような気がしてならない、後で、宮廷で全てを話すと言いながら、退場。

森

アウレリオ（ベルトリーノ）約束にしたがって話をしに神殿に行くつもりだと言う。そこへ、
神殿の扉が開き、

石像、屹立し手には剣を持ち登場して、近くにくるよう伯爵に言う。伯爵は、騎士らしく一対一で決闘したいので、手を差し出すよう言う。石像は彼に手を差し出し、その手をきつく握りしめ、それから次のように言う。

「悔い改めよ、伯爵、日が沈む前に」

彼は、悔い改めなければならないようなことは、したことがないと言う。それを三回繰り返して言うと、石像は声を大きくして、

「見よ、日が沈んでいく」

彼は答える。「日が沈んだとて、俺が伯爵であることに変わりはないだろう？」そこで、石像は言う。

「神よ、あなたに委ねます！」

伯爵は尋ねようとする。石像は彼を制止する。そこへ、

天が開き、雷鳴と地鳴りが聴こえ、明かりが消えて、空からアウレリオの足元に雷が落ちる。

彼は即座に地下に沈み、神殿の扉は閉まる。ベルトリーノはアンジェラを連れて逃げる。

町

国王、マリオ公爵がいる。そこへ、

マニフィコ、隠者、神殿の祭司、伯爵の話をする。そこへ、

カッサンドロ、娘が伯爵にさらわれたと、国王に告げる。そこへ、

ベルトリーノ、アンジェラ、アウレリオ伯爵の最期を語る。カッサンドロは娘と再会し、全員退場。

地獄

アウレリオ、地獄で呻いている。天空には石像が見える。

天空

石像とレオノーラ、白い服を着ている。そこへ、

プルート、悪魔

天空では、天使の合唱、地獄では、悪魔の合唱が、前者は神の栄光を、後者は地獄の劫罰を、正しきものの得る褒賞を、悪しき者たちの懲罰を歌う。

2. 石像の招待客（チーロ・モナルカ写本版）

登場人物

ナポリ王, マニフィコ・ドン・ピエトロ（スペイン大使）, ドン・ジョヴァンニ（その甥）, ドンナ・イザベッラ（貴婦人）, オッターヴィオ公爵, ザッカニーノ（ドン・ジョヴァンニの召使）, 武装した兵士多数, カスティリア王, ドットーレ（大臣）, ドン・ゴンサレス・ウッロア（騎士長）, ドンナ・アンナ（その娘）, 漁師の娘, スピネッタ, カベッリーノ（その夫）, 漁師たち, 漁師の娘たち, 農夫たち

道具

三人分の支度が整った食卓, 黒い皿の乗った黒い食卓, 片側には宮殿, もう片側には森, 真ん中に石像のための墓と地獄のある聖堂, 四人の近習, 美しい椅子三脚と, 黒いカバー三枚, ドン・ジョヴァンニ用の白いシャツとズボンと靴下, ザッカニーノ用のシャツ一枚, 踊りの場面に農夫と農婦たち二人ずつ, 武器に剣とマント, 武装兵士, 釣竿, 生きている魚, 火薬, 黒い鎖, 部屋用のガウン二着, ドンナ・イザベッラ用のシャツ

第一幕

ドン・ジョヴァンニ, 大声で叫ぶドンナ・イザベッラから逃げる。

ドンナ・イザベッラ, ああ, 助けて, 裏切り者よ!そこへ

国王, 燭台を手に登場。ドン・ジョヴァンニはその火を消す。国王は「誰か」と叫ぶ。そこへ, スペイン大使ドン・ピエトロ登場。国王は彼に, 婦人の声を耳にして部屋を出たのだが, その婦人を慰めものにした男に火を消されてしまったと言い, その男を探し出すよう命じる。大使は配下の者たちを呼ぶ。

宮廷人たち, おきまりの場面を演じて, 退場。

ザッカニーノ, ランタンを手にもち, ひそかにドン・ジョヴァンニと悪逆に満ちた暮らしを送っていると言い, 宮殿に行く命令を受けていると語る。眠気についてのラッツィをいくつか。そこへ,

ドン・ジョヴァンニ, 彼を殺そうとするラッツィをして, 召使に正体を明かす。ドン・ジョヴァンニは, 危険な目にあったが, ドンナ・イザベッラを堪能したので, カスティリアに旅立つつもりだと言う。召使は主人を詰り, 両者退場。

国王, ドン・ピエトロ, 宮廷人, 登場。ドン・ピエトロは国王に, 下手人はこっそりと窓から抜け出し, 衛兵も捕まえることができなかったが, オッターヴィオ公爵のマントが見つかり, ドンナ・イザベッラを呼びにいくところだと報告する。国王, 自分の甥ではあるが, 罰しなければならないと言う。そこへ,

ドンナ・イザベッラ（ドン・ピエトロ）, オッターヴィオ公爵を自分のものにしたい彼女は, 自

分を辱めたのは彼だと口にする。国王は彼女を叱責し、牢屋に入れ、オッターヴィオ公爵も牢屋に入れるよう、ドン・ピエトロに命じる。

オッターヴィオ公爵、服を着替えながら、国王に対する敬意のためにドンナ・イザベッラの部屋に行かなかったが、より良い機会を待つことにすると言う。そこへ、

召使、スペイン大使がお越しだと伝える。公爵はお通しするように命じる。そこへ、

ドン・ピエトロ、国王の言葉を伝える。公爵は驚き、弁明する。二人は、逃亡という手段を考える。オッターヴィオ公爵は召使を呼び、カスティリアに向けて旅立つ。ドン・ピエトロは、公爵の逃亡でドン・ジョヴァンニを助けられたと言い、退場。

海岸

漁師の娘たち、釣竿を手に、歌う。そこへ、助けを求める叫び声が響く。

ドン・ジョヴァンニ、ザッカニーニョ、漁師の娘相手に、お決まりの愛の場面を演じ、(ドン・ジョヴァンニは)相手を安心させるため、「石の男」に誓いを立てる。漁師の娘は彼を抱きしめ、ザッカニーニョとともに、彼を漁師小屋に連れていく。

カペッリーノ、スピネッタ、愛を語り合いながら、釣りをしている。そこへ、

ザッカニーニョ、ドン・ジョヴァンニは漁師の娘と一緒にいると言い、漁師たちを相手にラッツィイをはじめ、馬鹿げたことで相手をからかう。カペッリーノはそんなザッカニーノを見て、棒を持ち出し、彼を殴る。そこで第一幕終わり。

第二幕

海岸

漁師の娘、ザッカニーノに、自分の操を奪ったあの騎士は誰かと尋ねる。ザッカニーノ、あの方は高貴な貴族だと言う。そこへ、

ドン・ジョヴァンニ、出発しなければならないと言う。彼女は自分も連れて行ってほしいと言う。

ドン・ジョヴァンニは彼女を侮辱し、退場。ザッカニーノ、ラッツィイの後で退場。彼女は絶望して、退場。

カスティリア

国王、宮廷人、ドン・ゴンサレス・ドウッロアが、外交使節として滞在していたポルトガルから戻ったと言う。そこへ、

ドン・ゴンサレス、ポルトガル国王からの挨拶を伝え書簡を渡す。国王は彼に、子供は何人いるかと尋ねる。彼は、未婚の娘がひとりいると答える。国王は、自分が夫を見つけてやろう、宮廷にはオッターヴィオ公爵がいると言い、退場。ドン・ゴンサレスは帰宅する。

ドン・ジョヴァンニ、どうしたわけでナポリを後にしたのかと公爵に尋ねる。公爵は事情を語る。

ドン・ジョヴァンニは彼に、女を手に入れたかと尋ねる。彼はうなずき、相手は騎士長の娘で、

セレナータのための楽団を待っているところだと言う。ドン・ジョヴァンニ、マントと帽子を貸してくれるよう頼む。公爵はそれを貸し与える。ドン・ジョヴァンニ、退場を装って、ザッカニーノに言う。「オッターヴィオ公爵を、ひとつからかってやるつもりだ」。ザッカニーノ、ひとつどころかこれで二回目でしょうと言い、二人は退場。そこへ、楽団、セレナータを演奏する。オッターヴィオ公爵は、ドンナ・アンナの姿が見えないため、おそらく父親が来たので、部屋に下がったのだらうと言い、退場。ドンナ・アンナの声、「ああ、裏切り者、こんなふう 私の名誉を踏みにじるのね!」。そこへザッカニーノ、家から逃げる。そこへドン・ジョヴァンニ、マントに身を包み、抜身の剣を手にして、逃げながら、ドン・ゴンサレスと切り合う。相手は傷を受けて倒れ、「お願いです、神よ、この裏切り者に復讐を! こいつは私の命ばかりか、娘の名誉まで奪ったのですから」と言いながら、死ぬ。そこへ、ドンナ・アンナ、召使たち、明かりを手に登場し、彼女は父の死を嘆く。それから一同は、亡骸を家に運び込む。

夜明け

オッターヴィオ公爵、廷臣たちとともにいて、ドン・ジョヴァンニにマントを貸したことを後悔し、手荒なことをしなければいいがと言う。そこへ、ドン・ジョヴァンニ、ザッカニーノ、彼にマントを返す。オッターヴィオ公爵は、逢引はうまくいったかと尋ねる。ドン・ジョヴァンニ、相手の命が引いていたと言い、退場。公爵はその場に残る。そこへ、ドンナ・アンナ、父の死と、失われた自分の名誉を嘆きながら、登場。公爵は涙の理由を尋ねる。そこへ、国王、廷臣たち、すぐに登場。ドンナ・アンナはひざまずき、事の次第を語り、殺害された父の亡骸をウッロア家の礼拝堂に埋葬したと伝える。国王はそれを聞き、呆然としている。そこへ、ザッカニーノ、身を隠して、下手人を共犯者も含めて捕らえる算段を聞いている。国王はドンナ・アンナを慰め、家に帰らせる。一同退場。ザッカニーノは……²⁾。そこへ、ドン・ジョヴァンニ、全てを聞いていて、ほくそ笑み、二人は退場。

海岸

カペリーノ、スピネッタ、農夫たち、カペリーノとスピネッタの結婚式で盛り上がり、踊り始める。ドン・ジョヴァンニ、ザッカニーノ、そこに割り込もうとする。二人は女性をさらって、森に逃げ込む。第二幕終わり。

第三幕

聖堂のある海辺の町

ドン・ジョヴァンニ、ザッカニーノ、石像とおきまりの墓碑銘のある聖堂が見える。ドン・ジョヴァンニはそれを見て笑い、ザッカニーノはラッツィイ。ドン・ジョヴァンニは石像を招待し、二人は退場。聖堂の扉が閉まる。

カペッリーノ、スピネッタを問い詰めると、男に誘惑されたのだとあっさり答え、二人は訴えるために、町に向かう。

町

オッターヴィオ公爵（宮廷人）、ドン・ジョヴァンニの姿が見えないことから、ドン・ゴンサレスを殺したのは彼ではないかと、疑いだす。そこへ、ザッカニーノ登場。公爵は、ドン・ゴンサレスの殺害者が誰か分かれば、復讐を遂げてやると、威厳を込めて彼に言い、退場。ザッカニーノ、怯えてしまい、ドン・ジョヴァンニに報告すべく、退場。

晩

ドン・ジョヴァンニの召使たち、夕食の支度をしている。そこへ、

ドン・ジョヴァンニ、夕食のために登場。そこへ、

ザッカニーノ、オッターヴィオ公爵の件を彼に伝える。ドン・ジョヴァンニは彼を叩き、奴にこうしてやるべきだったと言い、この分も仕返しをしてやれと言う。ドン・ジョヴァンニ、席につき、召使を座らせる。そこへ、

石像、ドアの前でラッツィイをして、ドアをたたく。召使は、ひとりひとりと退場し、ドン・ジョヴァンニは明かりを手に、ドアのところへ行行って、騎士長を目にする。相手は、約束を守るためにやって来たと言われ、彼に言う。ドン・ジョヴァンニは相手を受け入れて、テーブルに案内する。石像は腰をおろし、ドン・ジョヴァンニは食事をして、楽師を呼び、石像はドン・ジョヴァンニの行いを歌う³⁾。そこへ、

楽師、貴婦人とのやりとりを歌い⁴⁾、石像はラッツィイ。ザッカニーノは恐怖のラッツィイをして、倒れる。石像はドン・ジョヴァンニを夕食に招待し、彼は約束をしてしまう。石像は退場。ドン・ジョヴァンニは、石像の足元を明かりで照らそうとする。石像、「明かりは必要ない、神の恵みという明かりがあるから」。全員、退場。

夜明けの町

カペッリーノ、スピネッタ、漁師たち、ドン・ジョヴァンニを訴えるべく、そろって向かう。

国王（オッターヴィオ公爵、宮廷人）、オッターヴィオ公爵から、殺害者はドン・ジョヴァンニではないかと疑っていること、マントの件、そして召使も事情を知っていることなどを聞き、

退場。

晩、海辺の村にて

ドン・ジョヴァンニ、ザッカニーノ、石像との約束を守るために、聖堂に到着。そこへ、
夕食の準備が整ったテーブルと聖堂

石像、彼を座らせ、夕食がはじまる。楽師が呼ばれる。

楽師、おきまりの八行詩の歌を歌う⁵⁾。

影と死、テーブルを片付けると、石像はドン・ジョヴァンニに手を差し出すよう言う。ドン・ジョヴァンニは「焼けるようだ、全身が火のようだ、離せ!」と叫ぶ。石像は「ドン・ジョヴァンニ、これが神の正義だ。悪しき行いをなす者は、悪を受け取る」と言う。ドン・ジョヴァンニ、剣をふりまわすが、空を切るばかり。そして倒れて地獄に行く。テーブルが消えて、石像は天に。ザッカニーノは恐怖に震えて、町に逃げる。

国王、宮廷人、カベッリーノ、スピネッタ、ドン・ジョヴァンニの悪しき行いを語る。そこへ、ザッカニーノ、国王に、ドン・ジョヴァンニが地獄に墮ちたことを伝える。国王と宮廷人は退場。

地獄

ドン・ジョヴァンニの姿が見える。うめき声をあげている。地獄が閉ざされ、天上では、ハーモニーが聴こえる。劇の終わり。

ドン・ジョヴァンニに対して歌われる歌の歌詞

お前はもはや、星を眺めるに値しない、
ふさわしいのは、永遠の劫火に焼かれることだけ。
邪悪な業に長けた、冷酷な魂よ、
地獄から出てきた、忌まわしい怪物よ。
お前が名誉を汚したあの少女たちは、
食人族の中でも、もっとも獐猛な怪物がお前をからかうよう
天に復讐を求めている。
ここでは、支払われない負債などない。

最初の楽師のための歌詞

私は喜びあふれ、世界を堪能し、
いついかなる時も、快樂を求める、
この欲望を充足させるのであれば、
他人の不都合など、気にもかけない。

二番目の楽師のための歌詞

お前はもはや、星を眺めるに値しない、
ふさわしいのは、蛇や竜にまみれることだけ。
忌まわしい業の悪しき使徒よ、
ここでは、支払われない負債などない。

3. 石像の招待客（カサマルチャーノ写本版）

登場人物

ナポリ王、オッターヴィオ公爵（その甥）、コヴィエッロ（その召使）、ドンナ・イザベッラ（宮廷の貴婦人）、ドン・ピエトロ・テノーリオ（ナポリ王の衛兵隊長）、ドン・ジョヴァンニ・テノーリオ（その甥）、ポッリチネッラ（その召使）、カステイリア王、騎士長ウッロア、ドンナ・アンナ（その娘）、召使たち、ドットーレ、ナポリの親戚たち、タルタリア、ロゼッタ（タルタリアの娘）、近習、楽師たち、石像、ティスベア（漁師の娘）、ポッツォラーノ、ナポリ王の宮廷人たち、カステイリア王の宮廷人たち

道具

ポッリチネッラ用の古い剣、角灯、釣竿二本、籠二つ、マント、新鮮な魚、はつか大根の束、箒、棒、ポッリチネッラの使うリスト、ドンナ・アンナ用の喪服、手紙、もたれるための椅子二脚、トランペット、火の点いた燭台二本、カラショーネ、タンバリンその他の楽器、飛翔のための竿、網、石像用の墓碑、椅子や食器棚など、食事に必要な贅沢な調度品一式、食べ物や飲み物、だがすべて真っ黒で、テーブルクロスも真っ黒、パンも明かりも黒で、皿の上には蛇、石像の馬と石像のための衣装、白い髭と鬘、胸当て、兜、盾、悪魔のための衣装二着、ドン・ジョヴァンニの魂のための肉色の衣装、炎のための香の粉と松脂

舞台

ナポリの町、ナポリ王の室内、森と嵐の海、オッターヴィオ公爵の室内、カステイリア王の室内、カステイリアの町、田舎、田園地域、馬上の騎士像と墓碑銘のある田園地域の聖堂、田舎の屋敷、陰惨な田舎の聖堂、地獄

第一幕

ナポリ、室内、夜

ドンナ・イザベッラ、ドン・ジョヴァンニ・テノーリオを引き留めて、相手が誰なのかを知らうとしている。彼は拒絶し、彼女は叫ぶ。「ああ、誰か！」そこへ、

国王、明かりを手に登場。ドンナ・イザベッラはその場を去る。ドン・ジョヴァンニは身を隠す。国王は曲者の正体を知ろうとする。ドン・ジョヴァンニは相手の明かりを吹き消す。国王は暗闇の中、

ドン・ピエトロを呼び、貴婦人と騎士の正体を突き止めるよう命じて、退場。彼はその場に残る。ドン・ジョヴァンニ、声から相手が叔父だと分かり、正体を明かす。ドン・ピエトロ、辱めた女性について尋ねる。彼、ドンナ・イザベッラだと答える。ドン・ピエトロ、宮殿は閉め切っていて、いたるところに衛兵がいるため、バルコニーを伝って逃げるよう助言する。ドン・ジョヴァンニ、急いで逃げる。ドン・ピエトロはその場に残り、

ドンナ・イザベッラを呼び、彼女の操を奪った男が誰か知っているかと尋ねる。彼女は、知らないが、オッターヴィオ公爵と逢引の約束をしていたと言う。ドン・ピエトロ、それなら公爵であって、他の誰かであろうはずがない、約束をしていたのだから、と言う。そして、国王に聞かれた場合には、夜、部屋と一緒にいたのは公爵であって、他の誰でもないと答えるように言う。そうすれば、責任上、公爵が結婚してくれるだろうと。彼女は部屋に引き下がり、彼はその場を後にする。

町

ポッリチネッラ⁶⁾、角灯と剣を手に、主人の帰りを待っている。横になり、明かりを消して、うとうとする。そこへ、

ドン・ジョヴァンニがバルコニーから落ちてくる。ポッリチネッラは物音で目を覚ます。二人は暗闇の中の格闘の場を演じる。その場面の後、二人はお互いの正体に分かって、カスティリアに向けて旅立つ。

室内、夜明け

国王、昨夜の貴婦人と騎士が誰か分かったかと、ドン・ピエトロに尋ねる。辱められた女性はドンナ・イザベッラで、罪深い騎士はオッターヴィオ公爵だと答える。国王、その女性を呼び出すよう命じる。彼はドンナ・イザベッラを呼ぶ。彼女は、自分を辱めたのはオッターヴィオ公爵だと国王に確言し、国王は彼女を叱責して、自室での謹慎を命じる。ドンナ・イザベッラ、退場。国王、オッターヴィオ公爵を逮捕するよう、ドン・ピエトロに命じて、退場。ドン・ピエトロは公爵の家に向かう。

オッターヴィオ公爵の部屋

オッターヴィオ公爵、服を着替えながら、昨夜、約束をしていたにもかかわらず、賭け事に時間を取られてしまったために、ドンナ・イザベッラの部屋に行けなかったことを、コヴィエッロを相手に悔やんでいる。そこへ、扉をたたく音がする。彼は、誰だか見てくるように言う。コヴィエッロ、行って、戻ってきて、国王の衛兵隊長だと言う。公爵は出迎えに行く。そこへ、

ドン・ピエトロ、昨夜ドンナ・イザベッラの操を汚した廉で、逮捕の命令が出ていると伝える。公爵は当惑して、ドン・ピエトロに自分は無実であると告げる。ドン・ピエトロ、カスティリアに逃亡するよう、相手に勧める。国王には、見つけることができなかつたと言っておくからと。公爵は彼に感謝し、その提案を受け入れて、退場。ドン・ピエトロは国王の元に向かう。

町

ドットーレ、親戚のタルタリア相手に、裁判所の仕事がすっかり激減してしまったので、カスティリアに居を移し、宮廷に出仕しようと考えていると告げる。タルタリア、自分も着いて行きたい、娘のロゼッタを連れていくと言う。一行は船を探しながら退場。

森と海

ティスベア、籠と釣竿を持って登場。村の静寂を称える。腰をおろして釣りをする。そこへ、ロゼッタがやって来て、挨拶を交わす。彼女も籠と釣竿を手にして、釣りを始める。ティスベアにどこから来たのか尋ねられると、彼女はナポリ人で、父と叔父と連れだって、カスティリアの宮廷に向かうところで、船の出発を待つ間この海辺に滞在しているのだと答える。二人はラツィで釣りをする。その後、嵐になって、海から叫び声が聞こえてくる。船が難破して、男が二人海に浮かんでいるのが見えると言い、「こっちが陸よ！」と叫ぶ。そこへ、ドン・ジョヴァンニとポッリチネッラ、陸に上がってくる。ティスベアはドン・ジョヴァンニを、ロゼッタはブルチネッラを介抱する。ラツィ。ドン・ジョヴァンニ、ティスベアに恋をした風を装い、素性を尋ねる。彼女は農家の娘だと答える。彼は、彼女と結婚することを誓い、二人は退場。ロゼッタはその場に残り、ブルチネッラと戯れる。最後に、彼を放って、退場。そこへ、

ポッツォラーノ、登場。ポッリチネッラを相手に、古のポッツォーリについて語り、七人兄弟の生まれであると言い、退場。ポッリチネッラ、その場に残る。そこへ、

ティスベア、彼にドン・ジョヴァンニについて尋ねる。彼は、一度の出産で生まれた双子であり、向こうは大ドン・ジョヴァンニ、こちらは小ドン・ジョヴァンニだと言う。「昼と夜」と「狼憑き」のラツィ⁷⁾をする。そこへ、

ドン・ジョヴァンニ、それを見ていて、前に進み出ると、彼を棒でたたく。ポッリチネッラ、ティスベアの後ろに身を隠す。「狼憑き」のラツィ。彼女は彼を宥め、ドン・ジョヴァンニは別れを告げる。ティスベアは一緒について行きたいと言う。彼は、自分のような身分の高い騎士と戯れるという名誉にあずかっただけだから、充分だろうといい、拒否する。そして、リストに彼女の名前を書き加えて着いて来るよう、ポッリチネッラに命じる。彼はリストを彼女に投げつけて、主人の後を追う。ティスベア、嘆いて海に身を投げ、溺れる。第一幕終わり。

第二幕

カスティリア, 室内

カスティリア国王, ナポリを離れてカスティリアに居を移した理由を, オッターヴィオ公爵に尋ねる。ナポリ国王の宮廷の高貴な婦人の名誉が損なわれたことに関して, 非難されたことを悲しんでのことだと答える。そして, その件については, 自分は無実であると明かす。国王は彼の味方になることを誓い, 宮廷に居場所を提供し, 保護を約束する。そこへ, トランペットの音が鳴る。国王, 誰が来たのか見て来いと言う。

コヴィエッロ, ウッロア騎士長だと答える。国王, 彼を通すように言い, 椅子を用意するように命じる。コヴィエッロ, 椅子を用意する。そこへ,

騎士長が登場し, 国王に挨拶をする。ポルトガルとカスティリアの二国間の和平を取りまとめたきたと言う。国王は彼に, リスボンについて尋ねる。騎士長, その町の美しさを称える。その後, 国王は彼に, 娘はいるかと聞く。彼, ドンナ・アンナという名の娘がひとりいると答える。国王, その娘の嫁ぎ先を考えてやろうと言う。騎士長, 喜び, 花婿の名を尋ねる。ナポリの騎士オッターヴィオ公爵だと国王は答える。騎士長, 喜び, その知らせを娘に伝えるべく, その場を後にする。国王, 今夜の結婚式の準備をするよう, 公爵に言い, 退場。公爵はその後に続き, コヴィエッロは喜びその場に残り, その後で退場する。

カスティリアの町

ドットーレとタルタリア, ロゼッタを村に残し, 宮廷に職を求めべく, 町に来たと言う。そこへ, コヴィエッロがやって来て, 互いに相手を認め合い, 再会を喜ぶ。コヴィエッロ, ロゼッタを連れてきたかと尋ねる。途中の村に残してきたが, 町に連れてくるつもりだと答える。コヴィエッロ, 彼らに援助を申し出る。ドットーレたちは, 彼を村に招待する。彼は行くつもりだと言う。ドットーレたちは別れを告げて, 退場。コヴィエッロは主人のもとへ向かいながら, 退場。

ドン・ジョヴァンニとポッリチネッラ, カスティリアに着いて喜んでいる。ドン・ジョヴァンニは, 町の景観, 騎士たちの奇行, 貴婦人の美しさを称賛し, たくさんの女性を堪能してやると誓う。そこへ,

オッターヴィオ公爵とコヴィエッロ, 素晴らしい縁組について話している。二人はドン・ジョヴァンニに気づいて, 驚く。ドン・ジョヴァンニも公爵に気づいて, 両者, 挨拶を交わす。公爵は, 陛下に仕えていると言う。ドン・ジョヴァンニ, おめでとうと言い, 女性はものにしたかと尋ねる。公爵, ドンナ・アンナ・ウッロアとの結婚について一切を語り, その後, コヴィエッロと脇にはける。ドン・ジョヴァンニ, ナポリでドンナ・イザベッラを弄んだように, 今度はドンナ・アンナを手に入れたいものだと, 召使に語る。そこへ,

召使, 手紙を手に登場。相手を公爵だと勘違いして, 女主人からの手紙を彼に渡して, 退場。彼はその手紙を読んで, 今夜二時, 例のマントにくるまった公爵を, ドンナ・アンナが自室で

待っていると知る。ドン・ジョヴァンニ、自分がそこに行こうと決める。そこへ、
オッターヴィオ公爵とコヴィエッコ、たたんだマントを手にはしている。ドン・ジョヴァンニ、
ちょっと野暮用があるので、マントと帽子を貸してもらえないかと、彼に頼む。彼がマントを
貸すと、ドン・ジョヴァンニは手紙を渡し、召使の手に渡っていたと言い、召使を責めるふり
をする。公爵、気にしないでくれと言い、ドン・ジョヴァンニは召使を連れて退場。公爵とコ
ヴィエッコはその場に残り、今宵の約束を記した手紙を読むと、楽師を準備すべく、退場。

田舎の屋敷

ドットーレ、タルタリアとロゼッタに、宮廷で働いている友達に会ったと言う。その名はコヴィ
エッコ。彼女は喜び、その人に会いたいものだと言う。彼を食事に招待したので、ここで待つ
ていればいいと言う。ロゼッタ、夫がほしいと言い、素朴さをめぐるラッツィの後、退場。

夜の町

ドン・ジョヴァンニ、完全武装をしたポッリチネッラに、楽師の準備は出来ているかと尋ねる。
ポッリチネッラ、もちろんですと答える。ドン・ジョヴァンニ、演奏を始めるように言うと、
楽師たちが演奏をする。そこへ、

ドンナ・アンナ、窓辺に顔を出し、部屋に上がるよう、合図をする。彼は楽師を解散させて、彼
女の元に行き、ポッリチネッラは彼に付き従う。

公爵と、楽師と、コヴィエッコ、音楽を演奏するが、誰も出てこない。騎士長を起こしてしまっ
たようだと言いながら、その場を去り、退場。

ドン・ジョヴァンニ、騎士長と切り合いながら登場。切り合いの場面の後で、相手を殺し、退場。
騎士長は倒れる。そこへ、

ポッリチネッラ、逃げる途中で、死者につまずいて転び、主人の後を追う。そこへ、

ドンナ・アンナ、明かりを手を、家から出てくる。父親が死んでいるのを目にして、泣き、召使
を呼び、死者を家に運ぶように言う。一同、退場。

室内、昼

オッターヴィオ公爵とコヴィエッコ。公爵は、昨夜遅く音楽を演奏して騒がせたことを、ドン
ナ・アンナに謝罪しに行くつもりだと言う。そこへ、

ドン・ジョヴァンニとポッリチネッラ。ドン・ジョヴァンニはマントと帽子を公爵に返して、感
謝し、昨夜はお楽しみのあまり死人まで出たと言い、退場。ポッリチネッラは主人の後を追う。
公爵たちはその場に残る。そこへ、

カスティリア国王、カスティリアは気に入ったかと彼に尋ねる。公爵、あなたの王国は、あまり
に美しいと言う。そこへ、

ドンナ・アンナ、黒ずくめで登場し、国王の足元に跪き、父を殺した男を裁いてくれと願い出る。

国王、その男への復讐を誓い、彼女を慰め、援助を約束し、家に帰らせる。彼女は、修道院に向かう。国王は、騎士長の霊廟を備えた聖堂の建立を命じ、あらゆる犯罪者にとっての避難所とするよう指定する。同害刑法を適用し、騎士長殺害の犯人が誰か知っている者には、一万スクードの賞金を与える布告を出すよう命じて、退場。公爵は、布告を出すようコヴィエッコに命じて、退場。コヴィエッコ、布告を出すために、退場。

ポッリチネッラ、その一切を聞いていて、主人に知らせようとする。そこへ、ドン・ジョヴァンニ、自分をほったらかしにしておいたことで、召使を怒鳴る、ポッリチネッラ、聖堂、避難所、同害刑法などの全てを主人に話す。ドン・ジョヴァンニ、それを聞き、召使とともに、市壁外の田野に向かう。

田野

ポッツォラーノ、ロゼッタとの結婚を、ドットーレとタルタリアと話し合っている。三人はその場面の後で、ロゼッタを呼ぶ。結婚できると聞いて、彼女は喜び、夫と手を取り合う。一同、楽器を手にして、踊りや演奏を始める。そこへ、

ドン・ジョヴァンニとポッリチネッラ、輪の中に入って、踊る。ドン・ジョヴァンニはダンス教師のラッツィの後、ロゼッタに抱き着いて、攫って行く。一同は、花嫁がいないことに気づいて、ポッリチネッラに返してくれと詰め寄り、騒音と棒打ちの中、第二幕が終わる。

第三幕

田舎、馬上の騎士像のある聖堂

ドン・ジョヴァンニ、農夫たちにしてやった悪戯を、ポッリチネッラと笑い合っている。召使、ご主人さまは楽しんだらうが、自分は棒で打たれたただけだと。そこで、ドン・ジョヴァンニ後ろを向くと、自分が殺したウッロア騎士長の石像のある聖堂を目にする。ドン・ジョヴァンニは賞嘆し、墓碑銘を読み上げ、晚餐に来ないかと石像を誘う。石像、承諾する。ポッリチネッラ、震え上がる。ドン・ジョヴァンニ、様子をうかがうため、ポッリチネッラを宮廷に遣わし、夕食までに戻ってくるように言う。ポッリチネッラは宮廷に向かい、ドン・ジョヴァンニ、退場。

ドットーレ、タルタリア、ポッツォラーノ、ダンスの先生とどこに行っていたのかと、ロゼッタに尋ねる。彼女は、洞窟に連れていかれて、大きな望遠鏡を手にもたされたと答える。一同、彼を訴えるべくその場を後にする。

室内

オッターヴィオ公爵、騎士長を殺害したのはドン・ジョヴァンニではないかと疑うコヴィエッコの話を知っている。公爵、あの人は由緒正しい貴族の生まれなのだと、召使を叱責する。そこへ、

ポッリチネッラ、公爵を見て、恐れながら敬意を込めて挨拶をする。相手は、主人について尋ねる。ポッリチネッラ、田舎の聖堂に身を隠していると言い、凶らずも、一切を暴露してしまう。それを聞いた公爵は憤り、召使に主人への決闘状を持たせる。ポッリチネッラは決闘状を持って、退場。公爵とコヴィエッロはその場に残る。そこへ、

国王、犯人が誰か分かったかと公爵に尋ねる。公爵は、ドン・ジョヴァンニの召使が言ったことをすべて報告し、今は聖堂に身を隠していると言う。国王、彼を包囲して、出てきたところを捕まえるよう命令を出す。そこへ、

ドットーレとタルタリア、娘にした行為について、ドン・ジョヴァンニを裁くよう、国王に願い出る。国王は約束し、一同、退場。

田舎の屋敷

ドン・ジョヴァンニ、召使の帰りを待ちわびている。そこへ、

ポッリチネッラ、ドン・オッターヴィオの決闘状を主人に渡す。主人は鼻で笑う。そこへ、厨房の扉が開いて、夕食を持って来るよう命じる。夕食の皿が運ばれてくる。ポッリチネッラとラツィをした後で、食べ始める。そこへ、扉をたたく音。誰なのか見に行き来いと命じる。ポッリチネッラ、石像だと言う。ドン・ジョヴァンニ、出迎えに行く。そこへ、

石像、入って来て、腰を下ろす。ドン・ジョヴァンニ、カスティリアで堪能した最も美しい女性に乾杯と言う。ポッリチネッラ、爆笑する。その後で、最も美しいのはドンナ・アンナだったと言う。石像は立ち上がり、ドン・ジョヴァンニを食事に招待して、退場。ドン・ジョヴァンニ、身づくろいをして、召使を連れて、退場。

町

ドットーレとタルタリア、ロゼッタの美点を並べ立てて、彼女を妻にしてくれるよう、ポッツォラーノをお願いしている。ポッツォラーノは承諾し、一同、退場。

田舎の、陰惨な聖堂

ドン・ジョヴァンニ、そろそろ石像に招待された時間だから聖堂に行くと、ポッリチネッラに言う。ポッリチネッラ、行くべきではないと言う。主人は彼を叱責する。そこへ、

石像、黒く陰惨なテーブルを持って登場。ドン・ジョヴァンニ、食事をする。最後に、石像は彼に手を差し出すよう言う。ドン・ジョヴァンニ、手を差し出す。石像、悔い改めるように言う。彼は、そんなことはありえないと答える。石像は空を飛び、彼は地に沈む。ポッリチネッラ、退場。

室内

公爵、ドン・ジョヴァンニを逮捕するよう、衛兵に命令を出しておいたことを、国王に報告する。

そこへ、

ポッリチネッラ、逃げながら登場し、主人が悪魔の国に行ってしまったと国王に告げる。国王、神はこのように悪しき者を懲らしめると言い、一同、退場。

地獄

ドン・ジョヴァンニの魂。呻き、劇の終わり。

註

- 1) 写本には塗りつぶした形跡が見られ、判読不明。
- 2) 写本のこの箇所は判読不明。
- 3) 「ドン・ジョヴァンニに対して歌われる歌の歌詞」
- 4) 「最初の楽師のための歌詞」
- 5) 「二番目の楽師のための歌詞」
- 6) いわゆる「プルチネッラ」のことだが、17世紀のナポリ方言では Pollicinella, あるいは Pollicenella。
- 7) 「昼と夜のラッツィ」はコンメディア・デッラルテでよく知られたギャグで、道化役がしばしば黒い仮面をつけていることから、主人の白い顔と対比し、「双子」というのに似ていないのはなぜかと問われた時に、「あっちは昼に生まれ、俺は夜に生まれた」と切り返す。「狼憑きのラッツィ」は、嘘をついているのがばれそうになった時に、「あいつは狼憑きで、時々妙なことを言う」「意味もなく乱暴を働く」と、もう一方の相手に思い込ませるラッツィ。